

生野

ウル リム (響)

第9号

1998年11月20日発行

題字：康秀峰

私の気づかされたこと

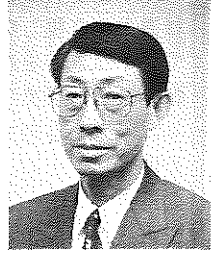
田原 敬司郎

聖公会生野センターは発足して今年ではや6年が経過しました。日頃からこのセンターの働きに注目している一人です。同センターで働いている人たちのエネルギーな行動力とユニークな発想は大変魅力的で、いつも教えられることがあります。大阪教区の中ではまだまだ地道な働きではありますが、実践的な活動は次第に定着してきたように思います。今年の教区会では教区が積極的に同センターを支援することが議案として提出されています。そして来年1月には「聖公会生野センター大阪教区後援会」が発足される予定です。教区の皆様が、共に生きる社会をめざしたこのセンターの活動を、各人の働きとして捉えて積極的に参与されることを願っています。

聖ガブリエル教会が生野地域に教会の再興を決意され、約13年前にできた教区の聖ガブリエル教会宣教拠点設置協力委員会(ガブリエル・プロジェクト)に参加したのがきっかけで、私は在日の人と初めて出会いました。正直なところ、以前は聖ガブリエル教会の存在、また在日についてもあまり知らず関心も無かったのですが、このプロジェクトで教会の建築に向けてこの教会の人々と一緒に活動している中に、次第に親しくお話ができるようになり、在日の人々の状況や社会環境などについて少しずつわかるようになりました。生野区小路東に土地を取得した後、小さなプレハブの建物で膝を突きあわせての生野研修に参加しました。外登法問題、指紋押捺等、外国人登録証も拝見しながら実に興味深いお話を聞き、私の知らなかった日本社会の現実も知りました。在日の人々の大切な文化にも接し、またおいしいキムチを一緒にごちそうになり、こんな交わりをしている人間同士なのになぜ差別があるのかとの思いでした。このような出会いのうちに日韓の歴史などを学び、私の間違った歴史認識や、在日の人々への偏見に気づかされてまいりました。

数年後、1995年に清里で開かれた日本聖公会宣教協議会に参加しました。最初は日程の都合で気乗りしませんでした、事前に配布された資料に目を通

しているうちに以前のガブリエル・プロジェクトで感じたことが思い出され、まだまだ大切なことを見落としているような気になり、何よりもそこから私たちの目指すべき姿も示されるような思いもしてきました。実際に参加して、日本聖公会の歴史の検証からはじまり、責任と応答、そして正義とは、また教会の本来的使命について等々、いずれも非常に重い内容でありました。私は今まで教会の問題として考えてこなかったことを指摘され、お恥ずかしいことですが、それが今の自分の歩みにつながっていると思いました。



昨年に開催された大阪教区宣教協議会で、私は在日関係の歴史資料を準備する小委員会に参加しました。戦前・戦中の日韓の貴重な資料から、私たちの過去の歩みを検証して行く中で、私の知らなかった驚くべき多くの事実を知りました。今日までの歴史で疎外され抑圧された人々のことをあまりにも知らなさすぎ、顧みる心も無かったことを思うと心が痛くなります。私たちの問題としてどのように捉えていくのか、多くの課題が残されています。そしてこの過去の歴史的事実を風化させること無く次世代の人に真実を伝えていく責任があると思います。

私たちは今年、大阪教区成立75周年という一つの節目を迎え、今後の歩みでは、イエス様の歩まれたように、弱い立場の人々との出会いの中で、共に生きる隣人となる決意をしました。そして、聖公会生野センターが、全ての人、特に弱くされている人の隣人となり、一人ひとりが大切にされる社会の実現をめざし、実際の働きを通してお互いに心と心とがふれあう協働の場となることを期待しています。日本聖公会また大阪教区の意義ある活動の拠点として、発信基地としての今後の働きに注目し共に歩みたいと思います。

(たはら・けいしろう 大阪教区連合男子会会長 聖ルシヤ教会信徒)

時のしるし

10月初旬、韓国の金大中大統領が国賓として来日、国会演説の中で「過去を直視し、歴史を恐れる真の勇氣」を日本に求めた。大統領は、演説の中で数々のことを述べているが、歴史に関する部分を一言にまとめれば、過去の直視と未来志向の両輪が強調されたものであった。この二つは常にセットであり、過去の直視のない未来志向はありえないし、未来志向のない過去の直視もありえないと思う。大統領は「今韓日両国は過去を直視しながら、未来志向的な関係を築いていくべき時を迎えました。過去を直視することは、歴史的事実をありのままに確認することであり、未来を志向することは確認した史実から教訓を得て、よりよい明日を模索するという意味です」と述べている。（以下「 」内はこのくだりからの引用）かつてのヴァイツェッカー大統領や教皇ヨハネ・パウロ2世の名演説を彷彿とさせるくだりである。

今、日本人の中では、未来志向のみをことさらに強調する考え方が大多数である。彼ら彼女らは、過去にいつまでもとらわれるのはいいかげんにして、これから先の未来のことを考えるべきだと、口をそろえたようにいう。教会の中でも、この考え方が多数を占めているようである。しかし、未来志向をうたう人たちは、かえって過去にとらわれ、過去の中に生きているために、未来を考えることのできない思考の持ち主であると私は思う。なぜなら、大統領が言うところの「過去を直視すること」を経なければ、未来へは進めないからである。過去を清算しないままに、どうして未来へ進めるのか、その理由を教えてほしいと、常々思っている。

さて、この「過去を直視すること」は言葉で言うのは簡単でも実際にはなかなか難しいことだ。まずは、歴史の掘り起こし作業が、この前提となる。その場合、歴史を作ってきたのは具体的な人間であるから、当然特定の人物の所業が検証されていくことになる。その結果、これまで顧みられることのなかった事実が浮き彫りにされ、問題化されることもある。その人物の所業について史実を明らかにする、つまり「歴史的事実をありのままに確認する」とき、従来の評価がくずれたり、偉大性が地に落ちたりという事態を招くことがしばしばある。日本聖公会では、明治の初代から信仰の継承がなされているケースも多いゆえに、これ

を身内の過去が暴かれたと受けとめてしまうと、この作業にかなりの抵抗が生じる。しかし、それは、故人の過去を暴くというような低次元の作業ではない。この作業は、決して故人を誹謗中傷し非難するために行われるのではない。事実を事実として明らかにすることによって「過去を直視」し、「確認した事実から教訓を得て、よりよい明日を模索する」ために行われる。その誤っている部分を私たちがこの先繰り返すことのないように、行われるものである。神学的には、罪責を引き受けるという行為の一端である。したがって、その作業をする者には、罪責を引き受ける決意と覚悟がなくてはならないのはもちろんのこと、興味本位な掘り起こしは慎まれるべきである。

どのような史実があろうとも、日本聖公会の偉大な先達の信仰があって、今の私たちがいるという事実には変わりがない。史実を葬り去って、そのままにしておくほうが、故人の信仰の継承を止めてしまうことになる。また、故人の罪責を後代の私たちが引き受けなければ、いったい誰が引き受けるのか。

そのためには、血縁関係者がまず率先して、その作業に着手し、故人の史実掘り起こしに尽力しなければならない。次いで、共同体としての信仰の継承者である聖公会の信徒たちが、その作業に取りかからなければならない。その結果、故人の罪の部分が明らかになっても、故人の偉大さはいささかもくずれはしない。なぜなら、その罪責を私たちが引き受けようとしているからだ。くずれるのではと恐れてしまう信仰の弱さは、また同じ過ちを繰り返す素地を作ることになってしまうし、信仰の継承をここで断ち切ってしまうことになる。

「歴史的事実をありのままに確認する」作業は、すでに第49定期総会決議の『日本聖公会の戦争責任に関する宣言』においてすでにうたわれている。

今、私たちひとりひとりに緊急に求められているのは、この宣言の実質化であり、内実化なのである。今回、キリスト者である金大中大統領が日本人に対して語った言葉は、そのままこの宣言の趣旨にも当てはまる。この宣言もまた、過去の直視と未来への志向をうたっているのである。

（まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒、大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員）

※※※※※

歴史的事実をありのままに確認する

松山 献

※※※※※

金大中大統領の来日と史料公開

藤永 壯

金大中韓国大統領の来日時に発表された日韓共同宣言には、過去の植民地支配に対し、日本側が反省、謝罪する文言が盛り込まれた。このこと自体は評価に値するものの、日本政府としての「反省と謝罪」は、言葉だけでなく、具体的な政策や行動をとまなつてこそ意味があるというのが、日本帝国主義の被害者たるアジア民衆の一致した意見だろう。金大中大統領は今回の共同宣言を評価し、今後韓国政府の側から歴史認識に関する議論を持ち出さないことにするそうだが、そうであれば、なおさら私たちは未解決の過去の問題にこだわり、真の意味でこれ乗り越えるための努力を続けねばなるまい。共同宣言が、元「慰安婦」などへの戦後補償を、免罪するかのように解釈されてはならない。

金大中大統領が今回の来日で「歴史問題の解決」をめざす方針であることは、早くから伝えられていたが、これが果たして実質をとまなうものなのかということも、また憂慮された点であった。とくに私のような歴史研究者が関心を持たざるを得ないのは、過去の朝鮮侵略・植民地支配に関連する史料・文書の多くを、日本政府が公開していないことである。そこで私たち日本在住の朝鮮史研究者は、大統領来日に先立ち、日本政府所蔵史料の公開と、その複製（マイクロフィルムなど）の南北朝鮮への提供などを要求する、声明の発表を計画した。この声明には61名が賛同し、さる9月10日に「朝鮮支配に関わるすべての史料の公開を求める朝鮮史研究者の声明」として発表することができた。

またその準備段階で、私たちが韓国の歴史研究者

に同様の声明を発表するよう呼びかけたところ、韓国側は提案した私たち以上の熱意をもって、迅速に行動を起こしてくれた。できあがった韓国側声明文は8月29日、「金大中大統領の訪日にあたって——韓日関係の正しい定立を願う大学教員の意見と政策提案」として発表された。100名が賛同者となったこの声明は格調高い文体で、史料公開のほか、日本の歴史教育是正、国家補償の実現、日朝修交への韓国政府の協力、日韓条約の改定などを求め、日本側の率直な謝罪がないままでの、天皇訪韓や日本文化への門戸開放に反対の意志を表明するなど、日韓関係全般にわたり、さまざまな提案を行っている。

もとより一片の声明文の発表で要求が実現するなどとは、私たちも考えていない。ただ史料公開は、実は日本の歴史学界が地道に政府と交渉を続けている課題の一つという事情があり、今回も好機を生かせず、突破口を開くに至らなかったことは、まことに残念と言うほかないのである。

「自由主義史観」とやらの影響で、実証主義的な歴史学への信頼が地に落ちた感のある昨今であるが、史料を発掘、解読し、これを批判的に検討して事実を明らかにする作業が、歴史研究における最もスタンダードな方法の一つであることは疑う余地がない。今回の「歴史問題の解決」は政治家・金大中の現実的選択であったろうが、これをもって「過去の清算」という課題が消滅したわけでは決していないのである。朝鮮史研究者として果たすべき責務に、今後もこだわり続けたい。

（ふじなが・たけし 大阪産業大学助教授）

韓国・朝鮮の食べ物と日本の食卓

鄭 大 聲

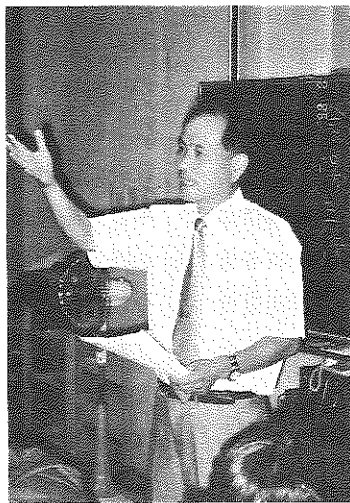
◆薬飯を食べながら

ヤッパプというのは、薬の飯と書きますが、薬が入っていると言う事ではなくて、材料に蜂蜜が使われているからです。朝鮮の歴史から言いますと高麗時代10世紀くらいからずっと蜂蜜は貴重な食べ物でその蜂蜜が使われている食品には「薬」という字が使われています。その後の李朝時代になりますと“薬食同源”という考え方が出てきます。これは儒教の影響で、儒教というのは親や目上の人を大切に思想です。そこではみんな懸命にいい物を親に差し上げようと研究するわけです。そこで「薬」、現代で言えば老人栄養学的な学問が出来てきたと考えられています。また陰陽五行という一つの思想があります。世の中には表と裏が有り5つのサイクルで回っているという、もとは中国の思想です。この自然の世界は5つの色で成り立っている。これが五行です。したがって、人間が自然の生き方をするならば、その5つの色をまんべんなく食べる事が、健康になるという考え方です。朝鮮料理でビビムパプを知っているかと思いますが。ビビムとは混ぜる・集めるという意味です。何を混ぜるかといいますと、5つの色を混ぜます。ご飯は白、野菜の緑、椎茸は黒、卵の黄色、人参の赤などです。

◆食べ物文化としてとらえる
5つの色をあわせて食べると体が自然に健康になるという考え方。これが薬食同源です。こういうことが一貫してあるわけです。だから食べ物は偶然にあるのではなく、それなりの歴史とそれなりの理屈

があるわけです。こういう考え方が濃厚に出てきたのは15世紀以降、李朝時代で儒教の思想です。

これからお話しするのは、共生ということです。在日韓国・朝鮮人と日本人とが共に生きていくにはお互いが理解しあわなければならない。理解の仕方



はいろいろあると思いますが、身近な毎日の食べ物を通じて理解が深まれば、もっと理解は早いだろうと思います。そういう意味でいくつかお話ししたいと思います。

まず一つは、食は文化であるということです。人間がつくり上げた食べ物には知恵が込められています。その知恵が何であるのかを知ることが大切で、お互いにその中に込められている人間の知恵を理解することができるし、その理解を通じてその民族やそれを食べている人を理解することができる

ということです。だから食べ物を自分が食べられないからとか見たことがないからといってそれを蔑んだり見下したり、それを食べている人たちに対して変に思ったりしたらそれは間違いなんです。

◆朝鮮料理はなぜ辛い

朝鮮半島で唐辛子を使うようになってまだ300年ほどしか経っていません。まず日本にポルトガルの宣教師が1542年に伝えたという記録があります。一方朝鮮には1614年に日本から唐辛子が伝わったという記録があります。日本から来たので倭芥子（ウェギョジャ）と呼ばれています。その次がおもしろいのです。「大毒在り」と書かれています。つまりおそらく1542年から1614年の間に伝わり、最初は毒物扱いだったという事が分かります。これが生活に使

われるようになったのはいつ頃かといいますと、1715年の山林経済という農業書に唐辛子の栽培法が出てきます。この頃からほぼ唐辛子は広まったと考えられます。漬物のキムチに唐辛子が使われるようになるのは、1766年の本に出てきます。コチュジャン(唐辛子味噌)もそれに出てきます。つまり唐辛子が使われるようになって長くて300年ではと考えられます。早く伝わった日本では広まらずに朝鮮半島では生活の中心を占めるまでになった。その違いは私は社会的な条件の違いだと考えます。まずはこの辛い唐辛子を必要とした食べ物があった、という事です。

唐辛子が来る前の辛い食べ物には、芥子やにんにく、山椒、輸入された胡椒、また蓼(たで)などが使われていました。これらが唐辛子と置き換わった事がまず考えられます。もう一つは肉料理です。朝鮮社会では、仏教の教えで肉を食べるのは禁じられていましたが、15世紀くらいから儒教社会になり、肉を食べるのは自由になりました。が、肉は大変な貴重品でした。その肉をおいしくするのは胡椒が非常によく合うんですね。しかしこの胡椒は高価な物で、なかなか使えなかった。この時に胡椒の代わりのように肉料理に使っていったという事が考えられます。さらに、料理を辛くした一つのポイントはコチュジャンです。コチュジャンが出来る前には、椒豉(チョシ)が使われていました。山椒味噌のことです。しかし山椒も貴重品でした。山椒は朝鮮半島の南の方でしか取れなかったのです。ですから、北に行くほど貴重品です。胡椒も栽培できないということで唐辛子が入ってきた。これは夏であれば取れるわけです。そこで、山椒の代わりに唐辛子が置き換わりました。それは文献に出てきます。そして19世紀の初めになりますと、このコチュジャンの作り方が料理のテキストで広められます。そうすると、各地で作られるようになります。これは常備用の調味料ですから、あらゆる料理に使われます。ですから、コチュジャンという新しい調味料が開発されそれが広まった事によって、朝鮮半島の料理がだんだん辛くなっていったと考えられるわけです。

もうひとつお話ししなければならない事があります。「唐辛子を毎日食べつづけてばかになりませんか」という話を聞きますが、そんな事はありません。

ん。私の大学で実際に学生に唐辛子を食べさせて、その唐辛子の働きを調べるという実験をしたグループがあります。少しずつずっと食べつづけるとかなり効果が出てきます。瞬発力が出るようになります。そして、スタミナがつきます。また、体の中の脂肪が早く燃えるようになります。また、ホルモンが出てストレスを解消します。また汗が出てきてエネルギーを発散するようになります。これらのことで気分転換になります。それから、体の中に入ったときに消化を助けてくれます。唐辛子は食べていくうちに慣れてくるんです。初めのうちは辛かったのがだんだん大丈夫になってくるんです。唐辛子にはそういう習性があります。「食べ慣れていく」「一回食べたら止められない」唐辛子というのはそういう食べ物です。食べ過ぎず適当な量を毎日摂っておれば体にとってプラスになる。そういう食べ物です。

それがそういう価値があるからこそ食べつづけてきた。もしこれがマイナスの要素が強ければ私たちの生活からとくに離れていますし、残らないはずですが。しかしそれだけの理由があって食べられてきたのです。朝鮮半島の生活の中から生まれた一つの食文化として、知恵の結晶として捕らえる事が出来ると思います。……

◆食を通じて理解を深める

今や日本での漬物産業の1割はキムチが占めるようになり日本人の食卓にはキムチが欠かせないものとなりました。このことは「食」から日本社会が「朝鮮」を受容するようになった一つの現れではないでしょうか。私は京都に生まれて育ち、在日の二世としていろんな差別を受けました。「朝鮮人にんにく臭い」とか実際に言われた事があります。食べ物の差別は非常に腹が立ちます。そのことを思うと世の中、昔日の感があります。今後とも食の文化は交流していきます。それを思うと、私たちはその知恵を理解しあい、共に生きていく事が、たいせつではないでしょうか。

今日は、どうもありがとうございました。

(ちよん・でそん 滋賀県立大学教授)

1998年8月30日 城南キリスト教会にて
文責：編集部

今回は精神障害当事者の話を聴き、文章にしました。これを通して私たちが精神障害者と共に生きることの助けになるようにと願っています。1回目の今回は生野の作業所に通うYさんの生活史です。(編集部)

1945年、日本が戦争に負けた直後の11月に今の韓国の済州島で生まれました。日本には兄を含めて多くの済州島出身者がいるので、1965年の20歳の時に来日しました。来日といってもいわゆる「密入国」です。まず、東京の荒川にいる兄の家に行き、2日後に大阪にやってきましたご存知のように大阪の生野区は私たち済州島の人間が多く住む街です。ここにも兄がいて、そこに身を寄せながら働きだしました。

プラスチックの成型工場に勤めました。仕事は真面目にしたと思います。簡単な機械の故障なんかは自分で直し、会社では優遇されました。

1974年、29歳の時に同じ済州島出身の女性と結婚し、現在18歳になる息子がいます。妻は今入院中です。日曜日には病院に行っていますが早く良くなってほしいです。息子は昼、工場で働いて夜は定時制の学校で勉強しています。息子から「お父さん、仕事せなあかんで」といわれたりもしますが、病気のためにそうもいかないのが実状です。

1980年、35歳の時に発病して入院しました。私に思うに酒の飲み過ぎではないかと思います。毎日仕事が終わってから午前2時3時まで飲んでいました。妄想や幻覚が現れたのです。富田林にあるS病院に入院しました。

入院したときに「密入国」を自主申告しました。入院するまでは在留資格がないということでびくびくした生活をしていましたが、働いているときに納税はきちんとしていたので警察、出入国管理局の取り調べも身柄を拘束されることなく、通いで済みました。無事に在留資格を得て、合法的に日本に在留できることになり、今に至っています。済州島から「密入国」で大阪にやってくる人は多くいますが、一生懸命働いています。ただ納税をちゃんとしていない人が多くいてるので、「そう言うことはちゃんとせなあかんで」と、よく言ったものです。

6ヶ月で退院したのですが又、調子が悪くなり今度はあの悪名高い大和川病院に再入院です。そこで

はとても辛かったです。看護師から殴る蹴るの暴行を受けました。大和川病院の悪事がばれて廃院になったことはとても嬉しいです。幸い兄が大和川病院から連れ出してくれましたが、病状はよく成らず、今度は柏原市にあるK病院に入退院を繰り返しました。入院中の苦労は病状が悪いときに保護室に入れられたことです。そこから出て一般病棟に移ったときはとても嬉しかったものです。

現在は当時K病院に勤務していた先生が地域で診療所を開いているのでそこに通っています。この作業所もその先生が紹介してくれました。薬が合わないときなどは関節や神経が痛みましたが今はとても落ち着いています。

作業所に通っていますが、特にこれといった仕事はしていません。50歳を過ぎてなかなかできる仕事もありませんし、作業所の仕事はごくごく単純なものです。だけどここに來てのんびりできるのはとてもありがたいです。もし作業所がなければ1日中外をぶらぶらするか、部屋に閉じこもりになるでしょう。土日は主に公園などで過ごしています。

今の生活は入院に比べるととても自由があります。料理はあまりしませんが、キムチや豚肉でキムチポッカ(豚キムチ)を作ったりするほかは弁当で済ますことが多いです。外食はお金がかかるのではとんどしません。やっぱり経済的に余裕の無い生活はしんどいものです。

仕事をしたいのですが、診療所の先生と相談しながらのんびり探そうと思っています。やっぱり薬を飲んでいるので仕事はなかなかできないのです。引っ越しをしてもう少し良いところに住みたいのですがなかなかうまくいきません。精神障害者の生活支援センター設立の運動しているということですが、そういうことも相談に乗って、解決してくれると聞いているので期待しています。

まだまだ日本で生活するでしょうが、いつかは韓国に帰ってそこで一生を終えたらいいなあとは漠然と思っています。

日本人として「辛さ」の体験とそれを超えて

城下 彰

今年の夏に行われた大阪教区「在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会」主催、生野センター協力の「日韓歴史研修旅行」に参加した。タフコル公園(旧パコダ公園)、安重根記念館、国立中央博物館の見学、日本人慰安婦記念館の竣工式への参加、そして奉天洞のナムムの家など、ひとつひとつの滞在時間は短かったが、それぞれが印象深いものであった。

その中で、8月15日(敗戦記念日、韓国では光復節)に韓国国立劇場で韓国の独立運動家である金九の生涯を描いたパンソリによるミュージカルを観劇した際に、思った事を述べてみたいと思う。

金九は、柳寛順、安重根、李舜臣などと並び韓国では誰もが知っている人物という。私も名前だけは以前から知っていた。会場は通路にまで観客が座るほど一杯であった。勿論、ひとつひとつのパンソリの歌詞やセリフは、わからないが、だいたいのストーリー、大きな流れは理解する事ができた。その中では、日本軍や日本が侵略する側として、そして抵抗運動の対象として描かれていた。その事自体は史実として当然の事で、ごく自然に私も捉える事が出来た。だが、劇中で日本軍に対して、ゲリラが手榴弾を投げ命中させる場面が二度程あった。その時、客席の何ヶ所から拍手が起こったのだ。それは、例えば、サッカーの韓日戦で、得点の時にスタジアム全体が歓声に湧くのとも異なり、中には淡々と見ている人も多かったが、会場の数箇所、しかし確実に一定数以上の人達が、拍手をしていたのだ。その拍手を聞いた時、私は複雑な思いに襲われた。一体、この拍手は何なのだろうか。

私は日本の一部にある「韓国が反日教育やキャンペーンをしていて、それが日韓関係に悪い影響を与えている」とか、または「日本は韓国にいい事をした」といった植民地支配への反省や謝罪を拒否するような主張に全面的に与するものではない。むしろ、非常に心苦しく思っている。しかし、今、その時の思いが何だったか考えてみると、それは、全く予期

していなかった事が起った戸惑いと、見ている人に、そういう行動を執らせてしまうという事実(そして、その背景の、日本と韓国が少なくとも政府間以外のところで過去についてのきちんとした和解ができていない事や、日本人に今だにある韓国、朝鮮の人たちを蔑む傾向)への軽い痛みと『だからといって、何も拍手をする事ないだろう』という多少の反撥だったのだと思う。

ウルリムは、日本人以外の人も多く読んでいる事と思うが、私にとって大袈裟に言ってしまうえば、それは過去に連なる「日本人として辛さ」を味わったのかもしれない。(勿論その陰に侵略された側が受けた多くの痛みを忘れてはならないが)

当日、公演の後で、私たちが日本語で話していたのに気づいたらしく、前に座っていた韓国の年配の方が、「日本人ですね、これを見て、どのように感じましたか。」と、日本語で尋ねて来た。あの時、私たちはそれに応える言葉を持たなかった。しかし、今、もし機会が与えられるのなら、その時に思った事を隠さずに卒直に述べてみたいと思う。そして、それと同時に韓国の人たちにも問いかけてみたいと思う。それは、勿論、劇全体への感想ではなく、あの拍手への思いをである。“一体あの拍手は何なのですか”“拍手をしないで淡々と見ていた多くの人達の思いはどのようなのですか、その人達も心の中では拍手喝采をしていたのでしょうか”“拍手をしなかった人達は拍手をした人をどう思っているのでしょうか。”もしかすると、その問いは、韓国の人にも「辛い」事かもしれない。場合によっては、論争になるかもしれない。しかし、お互いに自分を見つめ、率直に、思いを述べ合い、理解を深めあって、その「辛さ」を乗り越える事が、「共生」に繋がっていく事になるのでは、ないだろうか。

(しろした・あきら 大阪教区聖ガブリエル教会信徒、在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会委員)

大阪考⑦

越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究

杉原達(新幹社刊 定価2,000円+税)

本を作るとは不思議なものである。原稿が持ち込まれて、2ヶ月で作れてしまう本もあれば、企画を持ち込んで、結局、お蔵入りとなり、永久に出来なくなる場合もある。しかし、本を作る楽しみというのは、今回紹介するような本作りにつきと思う。もう数年前に、こんな本作りませんか？と声をかけ、お互いに約束を忘れずやっと出来た本が本書なのである。ちなみに、新幹社では、時間をかけて作った本は長く売れるというジンクスがある。



書店を歩いていて、ふと『大阪/大正/スラム』という新評論本が目にとまった。もう10年以上も前のことである。タイトルだけ見るとちょっとわかりづらいが、目次をみると、猪飼野形成史や君が代丸について3章にわたって書かれてある。これらのテーマは口ではきいたことがあっても、実際に活字になった物は少なかった。金賛汀さんの『異邦人は君が代丸に乗って』という岩波新書があるが、これより深く、資料的な裏付けもしっかりしており、多くの同胞に、こんな本があるよ、と知らせたかった。そこで耽羅研究会の『耽羅研究通信』に「読書案内」の紹介記事を私が書いた。

当時関西大学で教鞭をとっていた杉原さんは、雑誌『済州島』の購読者であり、『通信』を読んですぐに手紙を下された。そして彼の著書『オリエントへの道—ドイツ帝国主義の社会史』(藤原書店)を送って下さった。君が代丸のことを書いた杉原さんは、ドイツの社会経済史が専門の方なんだ、と初めて知った。そこでピンと勘がはたらいた。それなら、『大阪/大正/スラム』では3分の1程度しか触れられなかったテーマをもっとふくらまして1冊にしてみてもどうかというものだった。

杉原さんは会って見ると淡々とした方で、実に誠実な方だった。猪飼野に住んでいて、(現在は西宮

市)、子どもの父母会で君が代丸のことを聞かされ、それがきっかけで調べ始めたこと、日本人研究者が日本人として日本帝国の植民地支配のことを正面から向き合おうとしないのはよくないことだ、などというお話をうかがった。

以来、なんやかんやと10年が過ぎた。杉原さんは、いつもご自身の書かれた論文を送って下さった。ご批評を、と言われるので、けっこう痛烈な批判を寄せたこともあったが、編集者とはいいかげんなもので、自分では書けないくせに、著者には、ああ書け、こう書け、もっと書けと、ラッパだけは吹くものである。それらに対しても、いつも謙虚にご指摘ありがとうございました、そういう著者なのである。

他にも杉原さんは、台湾の政治犯にかかわる市民運動の中心を担い、昨年から「東アジアの冷戦と国家テロリズム」の国際シンポジウムを連続して行なう事務局長を担ってきた。しかし、今年、済州島4・3事件50周年のシンポを前に、春先から体調を崩された。闘病中のそんな中で、唯一、社会との窓口として、本書を上梓された。

さてさて、本書の内容に触れる前に字数がつきそうだ。本書のタイトルだけでは、読者にはとっつきが悪そうなので一言。現在、日本は総人口の1%が外国人で、国際化が否が上にも訪れているが、1930年代の大阪は10%以上が外国人だった。大阪人は70~60年前に異文化集団と隣り合って暮らしてきた歴史を持っているのである。侵略の時代の出来事ではあったが……。

大阪に住む朝鮮人の若い人たちへ。この本は君たちの父母、祖父や祖母の歴史そのものである。この本にたとえ名前はででこなくとも、この本に書かれてある歴史事実の一つとして私たちはここに存在している。かくいう東京にいる私も同じルーツを持っている。一家に1冊この本を蔵書に。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『越境する民』は聖公会生野センターでも取り扱っています。

高二三

連載マンガ⑨

남자 화장실 (男子トイレ)



- ⑤ アッパ、おしっこ。おしっこ。
オンマの所に行って、おしっこさせてといいなさい。
- ⑥ アッパ、おしっこ。アッパ、おしっこ。
アッパ、おしっこ。
わかった。わかった。行こう。
ははは、私はこうだから楽ちんだわ。
- ⑦ ハエリン、オンマにメンメして。
- ⑧ チェランさんはいいわね。
手を持って。
- ⑨ ハエリン、ちょっと待ってね。アッパがまず、おしっこしてから。
- ⑩ だめだよ！おまえは座ってしないと！

作者：崔正鉉 (ちえ・じょんひょん)
パンチョギ (もう一方) の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

- ① 私は山菜ビビムバブ。僕は山菜定食。僕も定食。私はきのご鍋。
- ② 英国に8ヶ月いたら家になつかしくなくて、どうして過ごそうかとしたよ。
私は仕事に集中すればそのまま忘れてしまうから、大丈夫よ
- ③ おじさん、山菜定食2つ、山菜ビビムバブ2つ、きのご鍋2つ。
パンチョギさんは子どもと離れていたなら、仕事にならないでしょう。
- ④ 僕は子どもがいないと仕事にならなくて、いたら面倒で、いなければ寂しくて会いたくなるし…。前に一度、離れていたんだけど結局仕事ができなかったのよね。



【1月】

- 19 トータスハウス運営委員会（毎月）
- 23 こみち寄席（奇数月第3金曜日）
- 24 精神障害者夜の集い（毎月）
- 26 精神障害者の生活の場づくりを進める会
事務局会議（毎月）
- 28 大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会
- 29 聖公会生野センター運営委員会
- 30 生野地域活動協議会委員会

【2月】

- 18 生野地域活動サポートセンター設立準備会
- 22 生野地域活動協議会20周年記念集会（KCC）
- 24 映画プロデューサー前田克弘氏と懇談
- 25 精神障害者の生活の場づくりを進める会
レクリエーション（八尾ボウルアロー）

【3月】

- 1 キリスト教学生運動（SCM）現場研修
（～12）（生野・釜ヶ崎）
- 7・8 3・1日韓の歴史を学ぶ集い「映画ナヌムの家上映と講演」講師：姜恵楨氏（大阪聖パウロ教会、聖ガブリエル教会）
- 16 「慰安婦」問題教科書攻撃反対集会
- 21 済州島4・3事件50周年慰霊祭
（生野区民センター）

【4月】

- 7 韓国語教室開講（毎週火曜日）
- 8 絵画教室開講（毎週水・木曜日）
- 14 朝鮮人強制労働未払い賃金を求める日本製鉄裁判第1回公判（大阪地裁）
- 14 こひつじ乳児保育園保母学習会
生野センター後援会世話人の会の集い
- 19 生野地域活動サポートセンター発足総会
- 25 北朝鮮食糧支援の集い（大阪聖パウロ教会）

写真と日誌でつづる

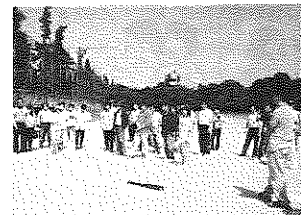
（1998年1月1日～



韓国語教室 夕涼み会



日本軍従軍慰安婦記念館 開幕式（於：韓国）



精神障害者の生活の場づくりを進める会 レクリエーション（真田山公園）

- 28 日韓教会教育協議会、生野地域現場研修
 - 29 跡地まつり バザー出店（浅香中央公園）
- 【5月】
- 13 NCC関西青年協議会運営委員会
 - 19 東成区精神障害者第2作業所設立委員会
 - 23 生野地域活動サポートセンター人権講座
その1「障害者」（KCC）

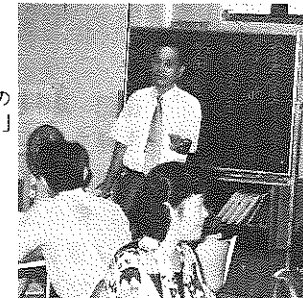
聖公会生野センターの活動

1998年10月31日）



生野地域活動サポートセンター
発足総会

9.1講演会「韓国・朝鮮の
食べものと日本の食卓」



3.1日韓の歴史を学ぶ集い
「映画ナヌムの家と講演」

- 26 日本聖公会管区総会（～28）
 - 27 精神障害者の生活の場づくりを進める会レクリエーション（真田山公園）
- 【6月】
- 6 大阪精神医療を考える会総会・シンポジウム
パネラーとして出席
 - 19 沖縄研修（～22）

日本聖公会正義と平和委員会主催）

- 27 「ナヌムの家のハルモニたち」出版記念会
- 28 聖公会生野センター大阪教区後援会の集い
- 30 日本製鉄戦後補償裁判 第2回公判

【7月】

- 6 精神障害者生活支援センター見学（東大阪）
- 8 近畿情報高等専修学校教職員生野現場研修
- 9 桃山学院大学で暖炉トークで講演
「生野におけるボランティア活動」
- 10 生野地域活動サポートセンター人権講座
その2「在日外国人」（生野区民センター）
- 15 精神障害者の生活の場づくりを進める会レクリエーション（南港プール）
- 19 金明坤氏（韓国映画俳優）と懇談
- 21 大阪府立学校外国人研究協議会夏期研修（生野）

【8月】

- 13 大阪教区日韓歴史研修旅行（～17 ソウル）
- 14 日韓聖公会青年キャンプ（～19 ソウル近郊）
- 21 済州島4・3事件50周年シンポジウム
（～24 済州）
- 30 9・1「共に生きる」を考える集い 「韓国・朝鮮の
食べものと日本の食卓」 講師：鄭大聲氏（大
阪城南キリスト教会）

【9月】

- 6 精神障害者地域支援センター見学（～8 島根）
- 30 大阪市に精神障害者生活支援センター設立要
望書を提出

【10月】

- 1 精神障害者小規模作業所（東成区）「サラダ
ばー」開所 運営委員会に参画
- 15 聖公会社会福祉連盟大会に参加（～17 北海道）
- 22 プール学院中・高 職員保護者生野現場研修
- 23 大阪市教職員新任者 生野現場研修

地域と共に歩む事を願い……

1998年は、生野地域活動サポートセンターの設立、精神障害者の生活の場づくりを進める会の運営、精神障害者の小規模作業所の設立など、特に生野地域の新しい試みに関わってきました。

生野地域では、草の根の障害者の作業所やグループホーム、在日韓国・朝鮮人の人権を守る活動など、様々な地域活動がされています。これらの活動は小

規模なゆえに、ひとつひとつ個性的ですが、小規模なゆえに運営が大変な面もあります。また当事者とその家族とで運営してきたという閉鎖的な一面もあります。そこでそれらの活動どうしのつながりを深め、運営や研修などさまざまな協力をしあうことで、より地域に開かれた活動へと展開していくステップとして、生野地域活動サポートセンターを始めました。なかでも、精神障害者の福祉制度はまだ始まった

ばかりではかの障害者福祉の水準からだいぶ遅れているのが現状です。しかしこのことはこれから作り出す分であり、当事者と支える市民とが中心となってみずから作り出す活動を続けています。10月にはあたらしい作業所も開所しました。新しい作業所では、当事者が運営に直接関わっています。自分にどんな支援が必要なのか、運営に直接反映するのはとても大切な事です。そして、来年の春を目標に生

活にかかわる様々な支援をする、地域生活支援センターの設立など、この地域で暮らすために必要な支援を作り出す運動を続けています。

だれでも、慣れ親しんだ地域でずっと暮らしたいものです。その為に必要なことを、地域と共に歩む事を大切にしながら、示しつつけたいと思います。

聖公会生野センター大阪教区後援会（会長：高野晃一大阪教区主教）では、このたび、各教会から選任された理事の中から、常任理事を選び、活動をいよいよ本格化させていくことになりました。各常任理事の方々のご紹介とともに、一言ずつ抱負を述べていただきました。



副会長 邑上 亨

聖公会生野センターの後援会のお世話をする事になってから、あわてて聖公会生野センターの資料を探しまわっている状態で生来楽天家の小生もいささかとまどっております。ご指導を！（むらかみ・とおる 川口基督教会）



会計 今村 祥子

小さな(体も)私ですが、神様に助けをいただいで、後援会のために少しでもお役に立ちたいと思っております。（いまむら・さちこ 石橋聖トマス教会）



副会長 松原 恵美子

種をまく段階で、副会長の重責がありますが、水、肥料をみなさまよろしく願いいたします。すてきな花が咲くように。（まつばら・えみこ 堺聖テモテ教会）



書記 坂東 長輝

古稀を迎えて長すぎる委員生活も来年はリタイアのつもりでいたのに、聖公会生野センターの常任理事に選ばれてしまいました。大役？でどうしようと思って不眠症になってます。（ばんどう・ながて 恵我之荘聖マタイ教会）

◆余韻

■結構読書はするほうだ（年に50冊くらい）夢になる本はあまりないが、今年は2冊もあった。「血と骨」（梁石日）「越境する民」（杉原達）。この2冊はあっという間に読んでしまった。小説と論文の違いはあるのだが、どきどきしながら、うなりながら読んだ本である。読書の秋に是非ともこの2冊を！（ピクアンチャ）

■子どもの頃、服のスソをかむ変なクセがあった。母が直そうと、スソに唐辛子をすりこんだのを知らずに噛んだその時、飛び上がるほど舌が焼け付き、それでクセがピタリと直った。唐辛子には、母への「辛(から)い思い出」がダブってくる。（大）

■今年も教会のバザーでチヂミを焼きます。キムチが無いのが残念ですが、来年はみなさん、キムチを持って、ぜひ食べに来て下さい。（恵）

■先日、聖公会社会宣教活動関係者懇談会という集まりを行いました。集まったのは東京のカパティラン、名古屋学生青年センター、愛知聖ルカセンター、聖公会生野センター、聖公会長田センターで実際に活動しているスタッフです。お互いの活動や運営についての細かい話までじっくり聞くことができとても参考になりました。これからも、積極的に様々な面で協力しあうことを決めました。（す）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-754-4356 / FAX06-754-4357

e-mail:cyj02040@nifty.ne.jp

発行人：木 村 幸 夫

編集人：大 橋 襄